

北京オリンピック陸上競技を見て

宮下 憲

はじめに

第29回の北京オリンピックは我が在職期間最後のオリンピックとなった。400mハードルの日本代表選手となった成迫健児選手の専任コーチをしていることから、代表コーチとして本大会に参加する栄誉を与えられた。多くの国際競技会をコーチとして参加してきたが、オリンピックのコーチとして、選手団に加わったのははじめてであった。今回のオリンピック大会陸上競技の大陸別・国別からみた陸上競技界の勢力関係や記録の達成度から大会を振り返ってみたい。大学体育研究第23号でシドニーオリンピックの陸上競技について報告をしているので、今回はいくつかの比較と共に選手団内からみた陸上競技も交えて報告としたい。

1. メダルのゆくえ

今回陸上競技の総メダル獲得数では米国が最多の23個で、ロシアが18個、ケニアが14個と続く(表1)。金メダルではロシア、ジャマイカの6個を上回る7個で米国がトップを堅持した。米国はシドニー大会ではメダル獲得数が15個と振るわなかったが、アテネ大会で

表1 北京大会における陸上競技の
国別メダル獲得数

	Country	Gold	Silver	Bronze	Total
1	USA	7 (4+3)	9 (5+4)	7 (5+2)	23 (14+9)
2	RUS	6 (2+4)	5 (1+4)	7 (3+4)	18 (6+12)
3	JAM	6 (3+3)	3 (0+3)	2 (0+2)	11 (3+8)
4	KEN	5 (3+2)	5 (2+3)	4 (4+0)	14 (9+5)
5	ETH	4 (2+2)	1 (1+0)	2 (1+1)	7 (4+3)
6	CUB	1 (1+0)	2 (0+2)	2 (2+0)	5 (3+2)
7	BLR	1 (0+1)	2 (1+1)	2 (1+1)	5 (2+3)
8	AUS	1 (1+0)	2 (1+1)	1 (1+0)	4 (3+1)
8	GBR	1 (0+1)	2 (2+0)	1 (0+1)	4 (2+2)
10	UKR	1 (0+1)	1 (0+1)	3 (1+2)	5 (1+4)
35	JPN	0	0	2 (2+0)	2 (2+0)

注: カッコ内は男子+女子

25個とし、今回はほぼ維持したことになる。今回も男子の米国、女子のロシアの金メダル、総獲得メダル数が最も多く、陸上競技王国といってよい。また、ケニアがシドニー・アテネ大会では総獲得数が7個であったのに対し、今回14個と倍増していることやジャマイカが前2大会で7、5個であったものが11個と大きく力を付けてきている。金メダルを獲得するのも大変であるが、複数以上のメダルを獲得しているのは20カ国に過ぎない。日本は銅メダル2個(4x100Rとハンマー投げ)と振るわなかったが、長距離種目以外での獲得であったことは評価されよう。

2. 陸上競技界の勢力

1位に8点、2位に7点、・・8位に1点というインカレ方式による、全種目について国別獲得得点を算出し、それをもとに大陸別に集計して、陸上競技界の勢力状況を比較した。国別得点(表2)は米国が1位で207点、2位ロシアが200点とその差が最近のオリンピック大会ではもっとも小さくなった。米国の総得点が前回大会よりも26.5点減少し、シドニー大会よりも58点増加している。ロシアはシドニー大会の132点、前回大会の192点から今回の200点と漸増していることが分かる。この両陸上競技大国の争いは、男女別得点や得意種目が異なるために、直接的な競り合いが少なく大会が終わってみなければ優位性を判定できない状況にあるが、今後も興味のあるところである。北京大会では男女ジャマイカが短距離を中心に大幅な得点を伸ばし、全体で4位に躍進したことが目立ち、上

表2 北京及びシドニー大会での国別得点

Total					Men					Women				
Country	Beijing		Sydney		Country	Beijing		Sydney		Country	Beijing		Sydney	
	Order	Point	Order	Point		Order	Point	Order	Point		Order	Point	Order	Point
USA	1	207	1	149	USA	1	105	1	129	RUS	1	144	1	86
RUS	2	200	2	132	KEN	2	75	2	61	USA	2	102	14	20
KEN	3	135	7	79	RUS	3	56	5	46	JAM	3	76	3	50
JAM	4	121	8	62	ETH	4	51	4	47	KEN	4	60	15	18
ETH	5	76	5	83	JAM	5	44	17	18	GBR	5	42	7	36
GBR	6	71	4	95	AUS	6	33	12	22	UKR	6	38	13	21
CUB	7	61	6	89	CUB	7	32	7	50	BLR	7	34	8	31
BLR	8	52	11	49	FRA	8	31	21	14	CHN	8	34	22	11
UKR	9	50	14	39	GBR	9	29	3	59	CUB	9	29	5	39
GER	10	43.5	3	100	POL	10	27	8	35	GER	10	25.5	2	55
JPN	29	14	27	15	JPN	17	14	36	5	JPN	-	0	24	10

位10位以内に入ってきた国は旧ソビエトからの独立国であるベラルーシとウクライナである。男子ではジャマイカ、オーストラリア、フランスがシドニー大会から大きく得点を伸ばした。女子では米国がシドニー大会の5倍の得点を挙げて2位に復帰したが、ロシアとは42点の差がある。その他、ケニヤ、ベラルーシ、中国がシドニー大会から大きく得点を伸ばし10位以内に入った。

大陸別に得点を集計し、全得点に対する割合で見ると(図1)、今回もヨーロッパ、北及び中央アメリカ、アフリカ、アジア、オセアニア、南アメリカの序列と獲得率に変化が無いが、アフリカの減少分が北及び中央アメリカの増加の結果となっている。今回もヨーロッパが半数に近い得点を獲得していることをみても競技の本場が欧州であることに変わらない。また、入賞者の国別リストを見ると、短距離ハードルなど水平スピードの獲得を得意とし、そのスピードを生かす水平跳躍種目にも優勢を示す北及び中央アメリカ、中

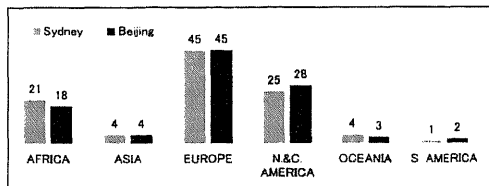


図1 オリンピック2大会における大陸別得点比率(%)

長距離を得意とするアフリカ、投擲や技術種目を得意とするヨーロッパなど、形態的特徴、居住高度、人種の特徴などによって種目適性があるように感じられるし、勢力関係が明確になってきていると捉えることができる。社会経済的な環境が競技年齢を押し上げているとも考えられるマラソンなど様々な要因が競技状況に反映されているのがみてとれる。

3. 記録の達成度

陸上競技は測定競技ともいわれ、競技は順位を争うのが本質であるが、記録が属性として付随してくる。北京大会では世界記録が5個、オリンピック記録が17個と記録的成果の挙がった大会であった。競技記録がそれぞれの自己最高記録(以下PB)やシーズンベスト(SB)および参加資格最高記録(QB)に対して、どのようなレベルで展開されたのかをみていくことはその競技大会のレベルを物語ることになるであろう。そこで、本競技大会に出場し記録のある選手で、しかも自己最高記録(PB)を有する選手を対象に、北京大会での最高記録(MB)のそれぞれの記録に対する達成度を調査した。

1) 種目別達成度

表3は北京大会におけるPBに対するMBの達成度を全参加者(All)、入賞者(Finalist)、メダリスト(Medalist)別に求め、全参加者の

表3 全参加者 (All), 入賞者 (Finalist), メダリスト (Medalist) の種目別男女別のPBに対するMBの達成率 (%)

Men				Women			
Event	All	Finalist	Medalist	Event	All	Finalist	Medalist
4x400R	99.1	99.7	100.1	10000m	98.8	100.8	101.1
4x100R	99.0	99.6	100.6	800m	98.8	99.4	99.9
110H	98.7	99.0	98.9	4x400R	98.7	99.1	99.3
400m	98.5	99.7	99.5	3000SC	98.5	100.4	100.3
400H	98.2	99.3	99.2	20KmW	98.4	101.0	99.9
200m	98.2	99.7	99.9	4x100R	98.3	98.7	99.0
10000m	98.1	98.3	98.0	400H	98.2	99.6	100.2
Marathon	97.9	93.6	98.8	100H	98.0	99.3	99.7
800m	97.8	97.9	98.0	400m	98.0	99.5	99.6
1500m	97.7	98.7	98.9	1500m	97.9	99.6	100.2
3000SC	97.6	99.4	99.4	200m	97.9	99.8	100.1
100m	97.1	99.8	100.3	Hep.	97.6	100.5	101.4
50KmW	97.0	100.0	99.7	100m	97.5	98.7	99.2
TJ	96.7	98.9	99.8	5000m	97.3	95.8	93.5
Dec	96.5	98.7	99.9	HJ	96.6	98.5	99.5
20KmW	96.3	98.8	98.7	TJ	96.3	99.8	99.9
5000m	96.0	97.5	97.8	Marathon	96.1	96.9	95.3
HJ	95.9	98.4	99.2	PV	95.2	98.6	98.4
PV	95.5	97.6	98.0	LJ	94.7	98.0	97.9
LJ	94.8	97.7	97.0	HT	93.6	97.9	98.8
SP	94.3	97.4	98.1	SP	93.4	97.8	96.2
HT	93.6	96.7	97.7	JT	92.5	100.4	101.6
DT	92.5	96.4	94.8	DT	91.1	93.5	95.7
JT	91.3	97.2	97.9				
Ave. of all events	96.6	98.3	98.8	Ave. of all events	96.7	98.9	99.0

達成度の高い順に種目別に示したものである。北京大会においては男子で達成度の高い種目はリレー、ハードル、短距離種目であり、投てき、跳躍種目が低い。女子では1万mが最も高く、長距離、中距離、リレー、ハードル種目が続き、男子と同様投てき種目が最も低く、跳躍種目がその上位にある。これらの傾向の中でリレー種目が高い傾向を示したのは出場制限(16チーム)があったためである。また、中長距離種目ではレースパターンによって記録の出方が違うが、予選、準決勝があるようなラウンドのある短距離種目や直接的に順位が決着がつくトラック種目ではPBに対する達成度が高い傾向があり、一人毎試技をするフィールド種目の投てき種目が最も達成度が低く、跳躍種目がそれに続く。一発レースとなるロード種目はその中間に位置し、レース条件や展開によって記録の出方が違っていることを示している。

また、全参加者よりも入賞者、入賞者より

もメダリストがPBに対する種目別の平均値において高値を示しているが、そのような序列がみられるのは男女共に15種目であった。長距離マラソン種目ではメダリストが入賞者や全参加者よりも低い達成度を示すのは高い最高記録を持つ選手が勝つためのレースをすることによるものと思われる。いずれにしても多くの種目において入賞者やメダリストはPBに対する高い達成度を示していることはピーキングがうまくいっていることの証左でもあり、メダ競技会で実力を発揮できていることを示すものである。

2) PB, SBの出現率

本大会では男女で合計224人・チーム(11.3%)が世界記録、五輪記録、大陸記録、国内記録などPB以上の記録を樹立し、シドニー大会146人(8.9%)よりも78人多くなっている(表4)。男子は96人・チーム(9.4%)、女子は128人・チーム(13.3%)であり、男子では

表4 ブロック別種目群でのPB及びSBの出現率(%)

Men						
	n	>PB	%	SB	%	Total
All	1026	96	9.4	103	10	199
Sprint	197	31	15.7	28	14.2	59
Hurdle	65	9	13.8	19	29.2	28
Relay	27	4	14.8	12	44.4	16
Middle	106	5	4.7	8	7.5	13
Long	112	11	9.8	9	8	20
Road	172	17	9.9	10	5.8	27
Jump	155	7	4.5	7	4.5	14
Throw	152	7	4.6	6	3.9	13
Multi.	40	5	12.5	4	10	9
Women						
	n	>PB	%	SB	%	Total
All	963	128	13.3	99	10.3	227
Sprint	181	29	16	17	9.4	46
Hurdle	67	10	14.9	6	9	16
Relay	32	3	9.4	13	40.6	16
Middle	75	13	17.3	10	13.3	23
Long	113	25	22.1	16	14.2	41
Road	129	20	15.5	11	8.5	31
Jump	144	10	6.9	11	7.6	21
Throw	179	9	5	12	6.7	21
Multi.	43	9	20.9	3	7	12

注)Road種目群はマラソンと競歩を含む

短距離、ハードル、リレーおよび混成種目で10%以上を示し、女子では長距離、混成種目で20%を超え、投てき、跳躍、リレー種目が10%未満の出現率で他の種目群では10%台を示した。男子では100m、200mでジャマイカのボルト選手による2つの世界記録(9秒69、19秒20)と彼を含む400mRチームの世界記録(37秒10)の更新があり、巨大競技場で風による影響が少なかったことが短距離関連種目で多くのPBが出現した要因としてあげられる。女子では中長距離種目で一段とスピード化が進み、前半から積極的にペースを上げていることがロード種目を含めて多くのPBを出現させた要因であろう。男女ともに跳躍、投てき種目では5%前後の低い出現率を示し、MBのPBに対する達成率が低いことと関連がみられた。その中において、女子棒高跳びのイシバエワ選手(ロシア)の世界記録更新(5.05m)は偉大であった。この大舞台での試合運びと並みはずれた集中力が、最も心理的な負荷のかかるストレスフルな垂直跳躍種目(バー種目とも呼ばれる)で大記録を樹立

したことは偉大という形容がぴったりである。女子の3000mSCでもロシアのガルナラ選手によって世界記録が樹立されたが、この種目は女子種目としての歴史が浅いことから、今後も記録の更新が続くものと見られる。

SBに関してはPB以上の記録を出した選手を除いてカウントした。SBは男女で202人・チームが樹立、PBと合わせて合計426人・チーム、出現率21.4%であった。これらの記録を出したおよそ2割の選手・チームは何らかの記録的成果を胸に帰国できた。シドニー大会ではこれらの記録は総計265人・チーム(16.3%)であったことからすると、今回の大会が好天にも恵まれ、いかに多くの記録的成果が挙げられたかが分かり、ハイレベルな大会であったと評価できる。

3) 日本選手の達成度

表5は日本代表選手の競技結果と本大会の最高記録(MB)がPBや選考競技会であった日本選手権の最高記録(Nch)に対する達成度を示している。Nch%はほぼSB%に相当すると

表5 日本代表選手の大大会成績及び大会最高記録(MB)の自己最高記録(PB)や日本選手権での最高記録(NchB)に対する達成率(%)

氏名	所属	種目	予選	準決勝	決勝	順位	MB	備考	PB	PBs	フロック	NchB	NchBs	フロック
朝原 直真	大阪ガス	100m	10:25/10:37				10:25		10:02	97.8		10:37	101.2	
塚原 直真	富士通	100m	10:35/10:23	10:16			10:16		10:15	99.9		10:31	101.5	
高 平 真	富士通	200m	20:58				20:58	SB	20:35	99.9	97.9	20:74	100.8	
末 統 真	ミスノ	200m	20:93				20:93		20:03	99.7		20:67	98.8	
金丸 拓三	法政大	400m	46:39				46:39		45:21	97.5		45:69	98.5	
栗原 未緒	高平一朝原	4x100R	38:52		38:10	3位	38:10	SB	38:03	99.8				
我孫子 為未	堀籠一成道	4x400R	3:04:18				03:04:18	SB	03:00:76	98.1				
松 宮 健介	ユニカ	5000m	14:20:24				14:20:24		13:13:20	92.2		13:47:81	96.2	
竹 内 隆行	早稲田大	5000m	13:49:42				13:49:42	SB	13:19:00	96.3		13:49:73	100.0	
松 宮 隆行	ユニカ	10000m		28:39:77		31位	28:39:77		27:41:75	95.6	96.2	27:51:23	97.2	
岩 澤 健介	早稲田大	10000m		28:23:28		28位	28:23:28		27:45:99	97.8		27:55:18	98.3	
若 水 喜久	富士通	3000mSC	08:29:80				8:29:80		8:18:83	97.9		8:29:75	100.0	
佐藤 敦之	中国電力	マラソン				着外			2:07:13		96.4			
大崎 浩史	NTT西日本	マラソン			DS				2:08:36					
尾方 剛	中国電力	マラソン			2:13:26	13位	2:13:26	SB	2:08:37	96.4				
内藤 真人	ミスノ	110mH	13:96				13:96		13:43	96.2		13:66	97.9	
成 塚 健児	ミスノ	400mH	49:82				49:82		47:89	96.1	96.3	49:17	98.7	
成 塚 健児	ミスノ	400mH	49:63				49:63		47:83	96.6		49:47	99.7	
山崎 勇喜	東京川味野高専	20kmW			1:21:18	11位	1:21:18	SB	1:20:38	99.2				
森 岡 健一朗	富士通	20kmW			1:21:57	16位	1:21:57		1:21:30	99.5				
谷 井 崎 孝行	佐川急便	20kmW			失格				1:20:99		97.8			
山 崎 勇喜	東京川味野高専	50kmW			3:45:47	7位	3:45:47		3:41:55	98.3				
谷 井 崎 孝行	佐川急便	50kmW			4:01:37	29位	4:01:37		3:47:23	94.1				
藤 野 直幸	富士通	HJ	2:15				2:15		2:03	92.3	93.7	2:15	100.0	
藤 野 大地	ニッポポーツ	PV	5:55				5:55		5:83	95.2		5:70	97.4	
澤 伏 広治	ミスノ	HT	78:16		80:71	3位	80:71		84:86	95.1	95.4	80:98	99.7	
村上 幸史	スズキ	JT	78:21				78:21		81:71	95.7		79:71	98.1	
福 島 千恵	ハイテックAC	100m	11:74				11:74		11:36	96.8		11:48	97.8	
舟 野 麻美	子デュリル	400m	52:60				52:60		51:75	98.4	98.3	52:68	100.2	
久保 真里菜	東京アパレルアカデミー	400mH	55:82	56:69			55:82	SB	55:71	99.8		56:21	100.7	
久保 真里菜	東京アパレルアカデミー	400mH	55:82	56:69			55:82	SB	55:71	99.8		56:21	100.7	
小林 祐梨子	豊田自動織機	5000m	15:15:87				15:15:87		15:07:37	99.1		15:07:37	99.1	
橋 上 加代子	フコック	5000m	15:20:46				15:20:46		14:53:22	97.0		15:16:27	99.5	
橋 上 有紀子	フコック	5000m	15:38:30				15:38:30		15:11:17	97.1		15:13:96	97.4	
橋 上 加代子	フコック	10000m			31:01:14	11位	31:01:14	SB	30:51:61	99.5	98.1	31:16:79	100.9	
赤 井 有紀子	三井住友海上	10000m			31:31:13	17位	31:31:13		30:48:89	98.7		31:15:07	99.2	
赤 井 有紀子	フコック	10000m			32:00:37	20位	32:00:37		31:15:34	97.7		31:15:34	97.7	
土 佐 崇紀	京都精華AC	3000mSC	09:49:70				09:49:70		09:33:93	97.3		09:48:43	99.8	
野 口 みずき	三井住友海上	マラソン			DF				2:22:46					
中 村 友梨香	天満屋	マラソン			DS				2:19:12		97.0			
小 崎 真裕美	海軍医務所	20kmW	1:29:43		2:30:19	13位	2:30:19		2:25:51	97.0				
川 西 祥子	大阪徳信	20kmW	1:32:21			26位	1:32:21		1:28:56	99.1	98.5	1:30:26	97.9	
池田 久美子	スズキ	LJ	6.47				6.47		6.86	94.3	94.3	6.42	100.8	
全平均													99.2	
男子平均													99.0	
女子平均													98.4	

※ロード種目の日本選手権記録は6月開催の日本選手権と開催時期が異なるために記載せず
 ※リレー種目の日本選手権開催時の記録はないため記載せず

考えてよい。MBのPBに対する達成度は出場し記録のある日本代表全選手・チームの平均が97.2%。男子は96.8%、女子は98.0%であり、PBの更新者はいなかった。この数字をみると男子の競技的状态が悪く、女子は走種目に選手が多いので、達成度も高い傾向を示したのではないと思われる。男子では100mの塚原選手が自己記録に近い10秒16を出し99.9%、女子では400mHで久保倉選手が準決勝に進出する活躍をみせ、自己の持つ日本記録に迫る99.8%の達成度を挙げ、それぞれ男女で最も高い達成度を示した。このような選手を擁するリレー種目では日本記録に近い高い記録を挙げ、男子400mRでは念願の3位入賞を果たし、女子は1600mRで実力差は大きかったものの99.8%の立派なできであった。

Nch%では全平均で99.2%であり、選考競技会と同等又それ以上の記録を出したのは10名で、全選手のおよそ4分の1であった。

日本代表選手のPB出現は残念ながらみられなかった。しかし、SBに関しては男子4人と2チーム、女子2名と1チームの合計9個を記録した。全参加者のPBとSBの合計した出現率が21.4%であり、日本代表は9個22.5%の出現率となった。SBのみであるものの、PBが数年前に樹立されている選手も多く、PBに対する達成度とは別の視点である出現率からみると同時に、本大会を日本のシーズン前半としての流れからみれば、全体としてはそれほど悪い出来ではなかったとも捉えられる。今回、QBに関しては言及していないが、本大会で決勝に残った記録を上回るQBを持つ選手が15名と1チームであったことを考慮すると、更にピーキングをうまく行うことが求められる。残念なことに、男女マラソン選手など有力選手の多くが故障を抱え、出場できなかったことも競技成果を挙げられなかった大きな理由であり、大舞台で実力を発揮できなかったことではないように

思われる。また、ここ数回のオリンピックでは日本選手がA標準記録の突破者が多く日本選手の実力が相対的に上がってきているが、ケガが多かったということであり、自己管理・選手管理が今後の課題となるであろう。

日本代表選手に自己記録や日本記録の更新はなく、いかにオリンピックの場で記録の更新が難しいかが分かる。また、ピーキングがしっかりできることは当たり前ではあるがオリンピックの舞台で戦うためには必須であることを改めて実感したものである。オリンピックが甘くないことは百も承知しているが、通常力を通常通り出せば何とかすることもまた感じる事ができた。

4. 成迫選手の戦い

400mHの代表選手である成迫健児選手は日本歴代2位のベスト記録47秒93を持ち、この記録を樹立した2006年シーズンは世界4位にランクされた選手である。

残念なことにオリンピック選考会の日本選手権大会ではアキレス腱痛があり、代表選手に選ばれたものの、本番の五輪大会に向けようやくレースができる状態に回復させるのが精一杯であり、積極的に仕掛けるレースはできず納得できる走りに至らなかった。

本番レースでは図2のスピード曲線が示すように、第1ハードルまでのコーナーで十分に加速できないために、スピードを立ち上げて前半をリラックスして走ることができない。常に加速している感じに見えた。もちろん

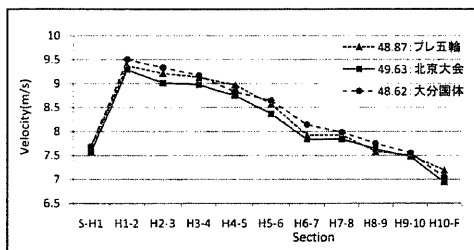


図2 成迫選手の北京大会及びその前後の400mHレースのスピード曲線

ん、レース終末部は練習量が足りていないので心配であったが、加えて前半の走りに力みが見えたために後半も伸びのある走りは出ずに終わった。2007年の世界選手権では百分の1秒差で決勝に進出できず、今回は百分の2秒差で準決勝に進むことができなかった。もう1本レースをすることができれば状況を大きく変えられる可能性があっただけに残念である。予選でアキレス腱の痛みが出なかったことは不幸中の幸いであった。

2008年シーズンの成迫選手の競技会記録は図3のようになり、最大の目標競技会である北京大会での記録が悪く、その前後の記録は決勝に残ることのできる記録だけに残念であった。大事なシーズンの大事な時期に、アキレス腱痛が発症し、その兆候を早期に読み取り、ハードル選手として命取りになるアキレス腱炎を完全に治癒させられなかったことがコーチとして心残りである。

今後は大型選手の利点を生かしたダイナミックなハードリングを洗練させて、北京大会で成し遂げられなかったファイナリストの目標を世界制覇にステップアップさせ、ロンドン大会でのリベンジを期している。このままで終わらしてはいけなく、終われないというのが実感である。

成迫選手はユニバシアード大会やアジア大会で順当に優勝を遂げたが、世界選手権でファイナリストを逃し、オリンピックでもつらいが良い体験を積むことができた。世界の大きな場を全て体験してきたことで今後は大

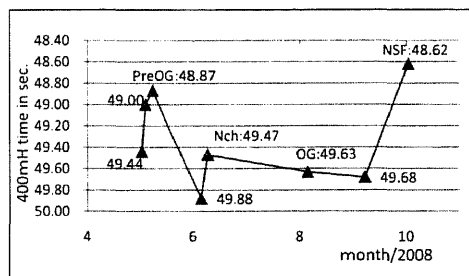


図3 成迫選手の2008年シーズンの記録変遷

きな舞台を味方にするような適応能力も必要であろう。また、更なる記録の向上を目指しつつも、勝つためのレース運びを身につける必要もある。そのためには心身ともにタフになることが不可欠であろう。

おわりに

今回、オリンピックのオフィシャルコーチとして、選手に帯同して選手村で生活し、試合準備をしたために、大会全体を見ることができなかったのは残念である。近代オリンピックの父、クーベルタン男爵は選手村を世界からの青年を集め、古代オリンピアの聖苑に倣って練習させ、教育する場にしようとしたのではないと思う。現在、そこでは確かに交流の輪が広がっているし、何らかの教育的なプログラムは文化プログラムとなって、毎夜、中国文化の紹介等が催されていた。しかし、あまりに大会が巨大化されたために全ての選手役員を集め教育するためには、陸上競技場が必要となることから、開会式などのプロトコルのなかでオリンピックの意義をアピールしようとしているのが現状であろう。その開会式として競技期間が長いために、全選手は参加できず、その薫陶を全参加者が受けることもできない状況にあるのが昨今のオリンピックといえよう。

日本代表選手は国民的な期待もあって競技至上的な殻から抜け出せず、オリンピック村での生活を楽しむ余裕さえないのが実情であろう。しかし、日常的に日本のトップ選手同士がスポーツや種目を超えて交流している様子を見ることができたのはそれなりに意義のあることであった。

今回、100mのボルト選手と女子棒高跳びのイシバエワ選手の2つの素晴らしい世界記録を目の前で見ることができ感動した。競技力の向上は先進国ではトレーニング拠点が設けられ、科学的なサポートによる集中した指導体制によってなされている傾向が広がり

つつある。その中で、ボルト選手はトレーニング環境の改善によって高い資質が開花しているし、ロシアのイシンバエワ選手は伝統的にトレーニング科学の集積がある中で育っている。資質の向上とトレーニング理論の深まりが競技力向上には不可欠であることを改めて両者は示唆してくれた。

世界のトップ選手は4年間のオリンピックサイクルでトレーニングを構成し、競技を続けているが、世界最高峰の舞台で戦い、満足のいく成果を残すことは非常に難しいが、少なくともよくピーキングができなければオリ

ンピックの場での活躍は期待できない。今回の調査資料はこの件に関し雄弁に物語っている。日本選手が記録的には世界水準に達している種目が多くなってきているので、大型競技会で成果を挙げていくためには、JISSやNTC等、最先端の知識や施設を積極的に利活用していくとともに、前述したが、選手の自己管理やコーチや競技組織の選手管理が今後の大きな課題であるように感じた。

以上が、個人としては悔しく残念な体験となったが、私が見て感じた北京オリンピックであった。